

# 医師・ホプキンスの凱旋

越 智 光 夫

(広島大学大学院整形外科教授)

ゲイル・ホプキンスと聞いただけで、ははんと思った人はまず四十五歳以上で、相当なプロ野球ファンか、広島に縁のある人に違いないだろう。彼は一九七五年、広島カープがセントラルリーグで初優勝した年に、助っ人として大リーグからやってきた。ファーストを守り、センター山本浩二、サード衣笠祥雄とともにクリーンナップトリオを形成した。その年の十月十五日、後樂園球場で行われた巨人戦九回表にとび出した、初優勝を決める彼のスリーランホームランをカープファンは忘れない。大柄でずんぐりした体形は、いかにもホームランバッターを思わせる風貌であった。一方で、ベンチに医学書を持ち込み、医師を目指す「日本一頭のいい野球選手」などと紹介されたのを覚えている人もいるだろう。

現在七十歳の彼が、今年五月に広島市で開催された第十八回日本整形外科学会学術総会に整形外科医として出席し、さらに広島対楽天戦の試合前に行われた始球式で、マツダスタジアム(彼が活躍した当時の広島市民球場は解体されたが)に帰ってきたのである。

午後一時、始球式のマウンドには学会会長であり、カープのチームドクターを務める私が立っていた。私の横には先発のバリントン投手。ホプキンスさんの名がコールされると、三万人の地を揺るがすような大歓声が球場を震わせた。彼はゆっくりとバッターボックスに向かってくる。私は、この大観衆の中で思いのほか平静でいられるなど思いつながら、彼が左バッターボックスで往年のように構えるのを見つめていた――。

はじまりは昨年二月上旬、サンフランシスコで開催されたアメリカ整形外科学会だった。会場のブースでは、翌年広島で開催予定だった学会の

プロモーションビデオを放映していた。お好み焼き、宮島、平和公園の画面を食い入るように見つめているその人を、私は、後ろからそっと眺めていた。五分ほど経っただろうか、「I Have you been to Hiroshima?」と声をかけた。振り向きざまに、「もちろん」という日本語を返したその人こそ、ホプキンスさんであった。

学会期間中、現在に到る彼の人生の歩みを聞くことができた。彼はメジャーリーグで野球を続けながらイリノイ工科大学の大学院に通っていたが、当時のルーツ監督の誘いに応じてカープに入団した。広島に来てからも、プレーするかたわら、広島大学医学部の藤田尚男解剖学教授の研究室で組織学を学び、野球と研究を両立させた。恩師の藤田教授が、一九七六年に中国新聞に寄稿された記事によると、

彼は練習の合間や、野球が中止になった雨の日に、研究室を訪れ、寸暇を惜しんで顕微鏡を覗き、組織学のスケッチを重ねていたという。アメリカ

かに帰国後はシカゴのラッシュ・ユイ科大学に入学、整形外科医をめざした。アメリカでは日本と違い、医師は希望する科を勝手に専攻できない。整形外科は専攻するのが最も難しい科の一つであり、彼の卒業成績はトップ5%に入っていたに違いない。シカゴでレジデントを終え、カリフォルニアでグループ開業をした。

六十歳を機に医療職を辞し、現在は大学で教育者として活動している。いろいろな話をしたが、一つだけ彼に伝えていないことがある。初優勝の年、広島大学医学部五年生で、医療系の霞キャンパス学園祭実行副委員長だった私は、学園祭に彼を招待しようと、人ごみのなか思いきって彼に声を掛けた。返答は「その時は広島にいない」という一言だけで、軽くあしらわれたと感じたものだった。その後、奇しくも十歳年上のホプキンスさんも私と同じ専門に進んだが、当時二十三歳の私は、こんな日が来るとは夢にも思わなかった。

私が始球式で投げたストライクからボールになるフォークボールを、単なる山なりの球と指摘してくれる人もいたが、往年のホームランバッターは本気かつ豪快に空振りをした。カープが優勝を忘れて長い時が過ぎた。「ホプキンス、カムバック」。優勝を待ち望むファンの前に、時空を超えてヒーローが帰ってきた。

(文藝春秋二〇一三年九月号)